

アンシャン・レジーム

旧体制下フランスにおける非正規本 —— リヨンで印刷されたエルヴェシウスの作品の場合 ——

Les publications clandestines en France sous l'Ancien Régime :
le cas des versions illicites des œuvres d'Helvétius imprimées à Lyon

Clandestine publications in France under the Ancien Régime :
the case of illicit versions of the Helvétius' Works printed in Lyon

坂倉 裕治
Yuji SAKAKURA

はじめに

宗教書に紛れた2巻ものの『精神論』(De l'Esprit) 44部をリヨンで押収したという1758年10月9日付の警察記録がフランス国立図書館に残されている。押収された荷の送り状には、ブリュイゼ(Jean-Marie Bruyset, 1719-93?)の筆跡が認められるとして、この印刷・書店業者が印刷、発送したものと推測される、と記されている(BNF: NAF 1214, f°277)¹。17世紀後半から18世紀を通じてリヨンはフランスにおける非正規本の一大制作拠点となっていた。ブリュイゼは、リヨンの出版検査官(Inspecteur de la librairie de Lyon)ブルジュラ(Claude Bourgelat, 1712-79)²から格別の庇護を受けて、18世紀中葉から後半にかけて、リヨン界隈ではもっとも手広く哲学、思想関係の非正規本を制作した業者であった。本稿では、『精神論』をはじめ、エルヴェシウス(Claude-Adrien Helvétius, 1715-71)のいくつかの作品がリヨンで秘密裏に印刷されていたと推測させる痕跡を整理する作業を通じて、フランス革命に先立つ旧体制下のフランスにおいて、書物の検閲システムにどのような抜け道があったのか、また、権力者たちから危険視されていた新しい思想が広まるのに非正規本がいかに大きな役割を果たしたのか、その一端を検証しようと試みる。

¹ 手稿資料については、所蔵先の略号、請求番号、資料番号または紙葉番号を本文中に指示する。所蔵先の略号は以下の通り。BNF: フランス国立図書館(Bibliothèque Nationale de France)、BML: リヨン市立図書館(Bibliothèque municipale de Lyon)、ADR: ローヌ県公文書館(Archives départementales du Rhône)、AML: リヨン市公文書館(Archives municipales de Lyon)。

² cf. Philippe Cottureau, Janine Weber-Godde, *Claude Bourgelat : un lyonnais fondateur des deux premières écoles vétérinaires du monde, 1712-1779*, Paris : Comité Bourgelat / Lyon : ENS éditions : Fondation Meyrieux, 2011, pp. 225-263. ブリュイゼとブルジュラの格別な関係のありようについては、稿を改めて論じたい。

1. 『精神論』事件

エルヴェシウスの『精神論』は、コンディヤック (Etienne Bonnot de Mably abbé de Condillac, 1714-80) によって紹介されたロック (John Locke, 1632-1704) の認識論を基盤としつつ、これを教育と立法 (législation) の問題へと応用する道筋を論じた点で、フランス啓蒙思想の潮流を代表する重要な作品に数えられている。宗教に依拠しない、人間の欲望を基盤とした社会秩序と道徳をうち立てる可能性を論じたことから、刊行直後から教会関係者たち、護教論者たちによる厳しい論難にさらされた。

『精神論』がどのような経緯で販売禁止となったのか、という点については、すでになりに掘り下げた研究が蓄積されている³。王権や教会に対する批判、公序良俗に反する内容を含んだ書物の印刷、流通を防ぐために王権が課した事前検閲制度を逃れるべく、18世紀の哲学者たちはしばしば、著者の名前を伏せ、外国で印刷されたかのように装って、口頭の黙許 (permission tacite) を得て作品を印刷する方法を選んだ。しかし、『精神論』は、正規の検閲手続きを経て当局から正式に出版許可を得たうえ、著者の名前をかかげて出版された。エルヴェシウスの幼少期からの友人で、ヴェルサイユの国王の狩猟場を管理する官職を父親から受け継いだ寵臣ル・ロワ (Charles-Georges Le Roy, 1723-89) の推薦によって、外務官僚テルシエ (Jean-Pierre Tercier, 1704-67) が検閲官 (censeur) をつとめた。検閲官とは、出版許可を与えるのに先立って対象となる書物の原稿に問題がないかを確認するべく、その都度任命される官職である。テルシエは外交問題には詳しいものの、哲学や神学についてはまったくの素人であった。そのうえ、ル・ロワは故意に順番を入れ換えて少しずつ原稿をテルシエに渡して混乱させ、作業を急がせて修正意見をつけさせなかった。1758年3月17日付で、テルシエは出版に問題なしと結論づけた⁴。印刷作業がかなり進んだ同年6月末、唯物論哲学や教会批判にかかわる内容を含んだ同書が危険であるという密告が、王権による出版統制の責任者、出版統制局長 (Directeur de la Librairie) であったマルゼルブ (Chrétien-Guillaume de Lamoignon de Malesherbes, 1721-94) に届けられた⁵。マルゼルブは、バルテルミ (Jean-Jacques Barthélemy, 1716-95) を検閲官として非

³ この点については、次が要を得ている。森村敏己「エルヴェシウスと『精神論』事件 (1758 - 1759)」、『一橋大学社会科学古典資料センター年報』12、1992年3月、10～14頁。さらに、次も参照。Didier Ozanam, « La disgrâce d'un premier commis : Tercier et l'affaire de l'Esprit (1758-1759) », in *Bibliothèque de l'École des Chartes*, n° 113, 1955, pp. 140-170. David Smith, "The publication of Helvetius's *De l'Esprit*", in *French Studies*, vol. XVIII, 1964, pp. 332-344. Johon M. Rogister, « Le gouvernement, le parlement et l'attaque contre *De l'Esprit* et l'*Encyclopédie* en 1759 », in *Dix-huitième siècle*, n° 11, 1979, pp. 321-354. Christian Albertan, article « Helvétius (L'affaire (1758-1761)) », in Didier Masserau (dir.), *Dictionnaire des anti-Lumières et des antiphilosophes (France, 1715-1815)*, Paris : H. Champion, 2 vol., 2017, t. I, pp. 688-698. « Introduction », in Helvétius, *Œuvres complètes*, sous la direction de Gerhardt Stenger, Paris : H. Champion, t. I : *De l'Esprit*, texte édité, présenté et annoté par Jonas Steffen, 2016, pp. 15-24.

⁴ 出版統制局の登録簿 (les registres de librairie) によれば、1758年4月20日付で出版許可がおりている。BNF : FF 21977, f° 42 r° n° 2630 *Discours sur l'Esprit*, PS. 20 av. 1758. FF 21998, f° 201 v° n° 2630.

⁵ マルゼルブは、王権による出版統制を統括する立場にありながら、宗教的権威にとって脅威となりう

公式に2度目の検閲を受けるようにエルヴェシウスを説得し、その結果、あからさまに教会を批判した部分を削除したり、過激な表現を改めたりするなど、修正を加えざるをえなくなった。27箇所にあぶ差し替えをほどこした版本が、同年7月27日になって、ようやく刊行となった。

『精神論』の刊行からほどなくして、同書の内容を知らされた王妃と王太子は激怒し、パリ高等法院も断罪文書の用意にとりかかる。エルヴェシウスとテルシエを守るべく、マルゼルブは発売からわずか10日後に販売の差し止めを命じ、8月10日には出版許可を取り消して販売を正式に禁じた。しかし、それだけではおさまりがつかず、激しい論難が続々と現れ、後に『『精神論』事件』と呼ばれることになる大騒動を引き起こした。じっさいには、標的となっていたのは、エルヴェシウスの作品そのもの以上に、むしろ、デイドロ (Denis Diderot, 1713-84) らの『百科全書』に見える、宗教的・政治的権威にとって「危険」とみなされた新しい思想であった。エルヴェシウスは同様の内容の作品は二度と書かないという誓いを立て、ようやく許された⁶。

禁書の烙印を押されることが、必ずしも作品の生命を絶つわけではないことに注意が必要である。断罪が、それを行う人の意図とは裏腹に、作品を宣伝してしまう効果を持つことも少なくなかったからである。この点について、デイドロは次のように述べている。

禁止が厳しければ厳しいほど、それだけ書物の値段をいっそうつり上げ、その本を読みたいという好奇心をいっそうかきたて、その本がいっそう売れるようにし、いっそう読まれるようにするのである⁷。

進歩的な知識人たちの関心を引いた作品は、売れるとなれば瞬く間に続々と海賊版が制作され、密かに読まれたのだった。

2. リヨンの印刷業者と非正規本

現在、ローヌ県の県都となっているリヨンの起源は、紀元前43年、フルヴィエールの丘にローマ帝国の植民都市ルグドゥヌム (Lugdunum) が建設されたことに遡る。アウグストゥスの時代にガリアの首府となり、河川と陸路を活用してドイツ、イタリア、スイス、さらに大西洋岸にも通じる東西南北の通商ルートが交差する交易の要衝として栄えた。中世には大司教座が置かれた。15世紀には北イタリアとの交易と金融で富を蓄え、さらにイタリアから技術を

る新しい思想に対して寛容であった。次を参照。木崎喜代治『マルゼルブ』岩波書店、1986年。

⁶ 関連する書簡、文書については菅原多喜夫氏による未刊行の翻訳（私家版、5分冊、2016年作成）がある。貴重な訳業を提供された菅原氏に謝意を表明したい。

⁷ Denis Diderot, *Lettre historique et politique ...sur le commerce de la librairie...*, *Œuvres complètes*, t. V, Paris : Club français du Livre, 1970, p. 371.

導入して、絹織物業と印刷業が盛んになった。16世紀前半には420もの印刷工房を擁したリヨンの印刷業が花開き、フランス・ルネサンスの一大中心地となった⁸。リヨンに先立って、パリではソルボンヌ大学の教員たちによって宗教書を印刷するために印刷機が導入されていた。これに対して、リヨンで印刷工房を開いたのは、リエージュ、ドイツ、スイス、イタリアなどと交易していた商人たちであり、その多くは、商業の中心であったメルシエール通り（rue mercière）およびその周辺に印刷工房や書店を構えた。こんにち旧市街に残るリヨンの市立印刷博物館には、印刷技術にかかわる貴重な資料が保存されている。リヨンでは書物の制作ばかりではなく、ドイツ、イタリア、フランドルとの間で書物の交易も盛んであった。しかし、16世紀後半にはパリの印刷業の後塵を拝するようになり、落差が急速に広がっていった。その背景として、中央の政治権力が地方に及ぼす影響力が拡大していたことが見逃せない。宗教戦争の災禍のみ込まれた16世紀の終わりには、リヨンの印刷工房の数は120余りに減った。フランス革命期、とりわけ、1793年の流血を伴う暴動によって、リヨンの印刷・書店業は壊滅的打撃を受け、19世紀にはいくつかの印刷工房が生き長らえたものの、この業種における輝かしい地位を完全に失った⁹。

リヨンで印刷された書物のうち、16世紀までに刊行されたものについてはほぼ網羅的な目録が存在する¹⁰。また、フランス革命を経た19世紀以降については、法定納本制度（*dépôt légal*）によって、書物の同定問題は原則として発生しない。しかし、17世紀、18世紀にリヨンで印刷された書物、とりわけ海賊版や禁書などの地下出版物の同定は、ごく一部にとどまっている¹¹。それには、以下のような理由がある。フランスでは、17世紀中葉に、特定の印刷出版業者にある作品を独占的に印刷、販売する権利を与える「特認（*privilège*）」と呼ばれる制度¹²が導入され、多くのばあい、王権の近くにあったパリの業者が優遇された。特認を与える

⁸ cf. Dominique Varry, article « Lyon », in *Dictionnaire encyclopédique du livre*, pp. 820-821. リヨンの印刷業にとって、イタリアの影響が決定的に重要であった。cf. Silvia D'Amico et Susanna Gambino Longo (dirs.), *Le savoir italien sous les presses lyonnaises à la Renaissance*, Genève : Droz, 2017. 16世紀に花開いたリヨンの印刷業の最盛期については、次を参照。宮下志朗『本の都市リヨン』晶文社、1989年。

⁹ リヨンにおける印刷、出版業の歴史については、以下に簡便な概略が提示されている。Dominique Varry, article « Lyon », in *Dictionnaire encyclopédique du livre*, sous la direction de Pascal Fouché, Daniel Péchoin et Philippe Schuwer, Paris : Editions du Cercle de la Librairie, 2002-2007, 3 volumes, tome II (E-M), pp. 817-822.

¹⁰ Henri Baudrier, *Bibliographie lyonnaise : recherches sur les imprimeries, libraires, relieurs et fondateurs de lettres de Lyon au XVI^e siècle*, 12 vol., publiée et continuée par Julien Baudrier, Lyon : A. Brun, 1895-1921. réimpr. Paris : F. de Nobele, 1964-65. Sybille von Gültlingen, *Bibliographie des livres imprimés à Lyon au seizième siècle*, Bibliotheca bibliographica Aureliana, Baden-Baden : Bouxwiller. V. Koerner, 11 vol., 1992-2007.

¹¹ 17世紀については、差し当たり、次を参照。Marie-Anne Merland (avec la collaboration de Guy Parguez), *Répertoire bibliographique des livres imprimés en France au XVII^e siècle*, Baden-Baden ; Bouxwiller : Valentin Koerner, 1989-2010, [Collection : Bibliotheca bibliographica aureliana], vol. 5, 26, 28, 29. また、18世紀については、地下出版物のごく一部が、Dominique Varryらの研究によって同定されるにとどまっている。

¹² cf. Henri Falk, *Les privilèges de librairie sous l'Ancien Régime : étude historique du conflit des droits sur l'œuvre littéraire*, Paris : A. Rousseau, 1906. Henri-Jean Martin, *Livre, pouvoirs, société à Paris au XVII^e siècle (1598-*

業者を首都に集中させることで、出版統制が容易になると期待されていたようである。ほんらい一定の期限が設けられていたはずの特認が延々と更新され続けることも珍しくなかった¹³。売れ筋の新刊書を印刷できなくなった地方の印刷業者たちは急速に輝きを失い、パリの業者の下請けをすることで（この場合も、不正に増刷することもあった）、あるいは、特認のついた書物の海賊版や権力によって禁じられた書物（禁書）を秘密裏に印刷することで、なんとか生き延びようとした¹⁴。かつて教皇庁が置かれた地としてフランスの王権が及ばなかったアヴィニオンとならんで、とりわけリヨンとルーアン¹⁵では、17世紀以降、海賊版が大量に制作された¹⁶。閉鎖的な同業者組合を通じて、パリの書店と対抗するために、リヨンの印刷書店業者の間で海賊版を制作、販売するためのネットワークとも呼びうるような強固な協力関係が発達した¹⁷。海賊版を制作したりヨンの業者に対して、特認を得ていたパリの業者が起こした訴訟、証拠品の確保のための家宅捜索、非正規本搬送中の押収などにかかわる記録文書が、海賊版の存在をこんにちに伝える主要な史料となっている。

旧体制下フランスにおける出版をめぐる、留意すべき点がほかにも存在する。通常の手続きでは出版が許可されないはずの書物について、外国で印刷されたものが輸入されたかのように装うことを条件に印刷を暗黙のうちに認めるという「黙許」の制度は、1715年ごろにフランスに導入され、1750年代から頻繁に用いられるようになった。タイトル・ページには著者の名前も発行者の名前も記されないものも数多くあった。ライデン、ロンドン、アムステルダムなどと印刷地を偽り、実在の、あるいは架空の発行者の名を記したものもあった。「印刷地アムステルダム（À Amsterdam）」のように大きめの活字で偽りの発行地を記し、小さな活字で「パリの…書店販売（Et se vend à Paris chez…）」などと記しているような場合のように、黙許を受けた書物であることが比較的容易に判別できる例もある。しかし、実在する外国の業

1701), Genève : Droz, 2 vol., 1969. Nicolas Shapira, « Quand le privilège de librairie public l'auteur », in Christian Jouhaud et Alain Viala (dirs.), *De la publication entre Renaissance et Lumières*, Paris : Fayard, 2002, pp. 121-137. Claire Lévy-Lelouch, « Quand le privilège de librairie public le roi », in Christian Jouhaud et Alain Viala (dirs.), *De la publication entre Renaissance et Lumières*, pp. 139-159.

¹³ リヨンの印刷業者を代表して、ボジョラン（Antoine Beaujolin）は、特認の更新に対して1680年10月4日付書簡で抗議している（AML : HH100）。

¹⁴ cf. Jacqueline Roubert, « La situation de l'imprimerie lyonnais à la fin du XVII^e siècle », in *Cinq études lyonnaises*, Genève : Droz, 1966, pp. 77-111. Guy Parguez, « Essai sur l'origine lyonnaise d'éditions clandestines de la fin du XVII^e siècle », *Nouvelle études lyonnaises*, Droz, 1969, pp. 93-130. Dominique Varry, « Le livre clandestin à Lyon au XVIII^e siècle », *La lettre clandestine*, n° 6, 1997, pp. 243-252. Dominique Varry, « Une géographie de l'illicite : les espaces du livre à Lyon au temps des Lumières », *La lettre clandestine*, n° 8, 1999, pp. 113-133.

¹⁵ 旧体制下ルーアンの印刷・書店業については、さしあたり次を参照。Jean-Dominique Mellot, *L'édition rouennaise et ses marchés (vers 1600- vers 1730) : dynamisme provincial et centralisme parisien*, Paris : École des Chartes, 1998.

¹⁶ ヴァリーによれば、16世紀はじめには、ヴェネチア出身の業者たちによって海賊版が制作されていた。D. Varry, article « Lyon », in *Dictionnaire encyclopédique du livre*, t. II, pp. 820-821.

¹⁷ cf. Anne Bérroujon, « Les réseaux de la contrefaçon du livre à Lyon dans la seconde moitié du XVII^e siècle », in *Histoire et civilisation du livre*, vol. II, Genève : Droz, 2006, pp. 85-111.

者の名を記した版本については、実際に印刷した業者を同定することが困難である¹⁸。

海賊版の中には、特認によって守られた正規本よりも安価な価格で売らなければならない必要から、制作費の中でも特に大きな割合を占める用紙について品質を必要最低限なレベルまで落とし、小さな判型にできるだけ活字を詰めて印刷した、粗悪な廉価版も数多くあった。その一方で、「差し替えなし版 (édition sans cartons)」などとして正確な版本であることをうたったり、本体となる作品に関連する文書(断罪文書、断罪に対する反論など)を併録したりして、正規本にはない付加価値によって売ろうとするものもあった。地下出版されたものの中には、こんにちに名を残す著述家の作品もあれば、政府への批判、宗教的に異端とされる主張、性的な内容を含んだ、こんにちではすっかり忘れ去られた作品もある。売れるものは何でも印刷されたのだった。

海賊版の制作・販売によって、単に生き延びるだけでなく、富を築く業者もあった。リヨンでは、ジャン＝マリ・ブリュイゼが、デュプラン家 (les Duplain) とともに、その筋で名を残している¹⁹。17世紀後半から19世紀の前半にかけ4世代にわたってリヨンの印刷・書店業の歴史に名を刻んでいるブリュイゼ家であって、もっとも商業的成功をおさめたジャン＝マリは、王権の下で出版統制に関わっていた官吏たちをつぎつぎに味方につけて、その手厚い庇護の下で厚顔無恥にふるまっていたらしい。ブリュイゼの印刷工房と書店はリヨン市内のメルシエール通り界隈にあったものの、自らが制作した海賊版や不正に輸入した書籍の在庫は、印刷業に直接かかわらない別業種の職人の家や、家宅捜索のために警察が踏み込むのを躊躇するような神聖な場所(たとえば、修道院の個室)、地下倉庫、市外の秘密倉庫などに巧妙に隠されていたらしい。店舗では、辞書、手引き書、宗教書など、問題のない正規本の後ろ側に海賊版を隠して陳列する手法で販売していた。もともと、リヨンでは、印刷工房、書物を販売する店舗、住居を分ける業者が多く、市外に倉庫を持つ者もめずらしくなかった。また、頻りに転居する業者もあった。こんにち、こうした「不正」の実態の全容を解明することはきわめて困難な状況にあり、家宅捜索の記録などによって、かろうじてわずかな手がかりを伺い知ることができるにとどまる。壁や家具で隠された扉が、パリの書店の執拗な捜索によって暴かれた例なども記録されている²⁰。ブリュイゼは、リヨンで違法な海賊版を印刷、販売しただけでなく、アヴィニオン、ジュネーヴ、ヌーシャテルで印刷された書物を運び込んで販売していた。また、逆に、自分が印刷した海賊版をこれらの街でも販売するルートを作っていた。

¹⁸ cf. Dominique Varry, « Une édition de 1764 des Œuvres de Montesquieu sous fausse adresse d'Amsterdam restituée à l'imprimeur-libraire lyonnais Jean-Marie 1 Bruyset », *Montesquieu, œuvre ouverte? (1748-1755) : actes du colloque de Bordeaux* (6-8 décembre 2001, Bordeaux, bibliothèque municipale), présentés et publiés par Catherine Larrère, *Cahiers Montesquieu*, 9, Napoli : Liguori / Oxford : Voltaire Foundation, 2005, p. 69.

¹⁹ cf. Sheza Moledina et al., *Sur les pas des imprimeurs lyonnais*, Lyon : éditions livres EMCC, 2012, pp.79-82. ブリュイゼー族については、稿を改めて詳しく論じたい。cf. Dominique Varry, « Une famille de libraires lyonnais turbulents : les Bruyset », *La lettre clandestine*, n° 11, 2003, pp. 105-127.

²⁰ cf. Dominique Varry, *op.cit.*, 1999, pp. 116-117, 124-125.

3. リヨンで印刷されたと推測される『精神論』

冒頭に触れた警察の押収記録に記されたりヨンの印刷・書店業者ブリュイゼが印刷したとされる海賊版『精神論』について、残された情報はごくわずかである。しかし、エルヴェシウスの著作に関する現時点でもっとも包括的と目されるスミスの目録²¹と照らし合わせると、リヨンで印刷された可能性のある1758年以前に発行の2巻本の『精神論』は、E.6およびE.7と付番された2点のみで、いずれも12折判である。スミスの目録に依拠して、同定に必要な最小限の情報を拾っておこう。

E.6 1758, 2 vol, in 12° (BNF : R38302 ~ 38303)

DE / L'ESPRIT. / [...] / A PARIS, / Chez DURAND, Libraire, rue du Foin. / M.DCC.LVIII. / Avec Approbation & Privilège du Roi. Vol. 1 2-448; misprinting 434 as 344. Vol. 2 2-452.

E.7 1758, 2 vol, in 12° (BNF : R12296 ~ 12298)

DE / L'ESPRIT. / [...] / A AMSTERDAM, / Chez ARKSTÉE & MERKUS, Imprimeurs / Libraires. / M.DCC.LVIII. / Vol. 1 2-450; misprinting 36 as 6, 235 as 135, 377 as 373. Vol. 2 2-452.

両者の本文に使われている版は同一ではないものの、使用されている活字セット、版組ルール、装飾に著しい類似が認められ、同じ印刷工房で制作された可能性がきわめて高いと推測される。さらに、同目録でE.16と付番された版本にも同様の特徴が認められる²²。

E.16 1761, 2 vol, in 12° (筆者所蔵)

*DE / L'ESPRIT. / [...] / A AMSTERDAM, / Chez ARKSTÉE & MERKUS, Imprimeurs-/ Libraires./ M.DCC.LXI. / Vol. 1 i-xij, 1-467; misprinting * as 3*. Vol. 2 1-504 (文末図版1、2参照)*

いずれも、タイトル・ページに著者の名前を記していない。同じ印刷工房で制作されたとすれば、E.6、E.7、E.16の順に印刷されたであろうと推測される。この推測の根拠は以下のとおりである。E.6には付録がないうえ、3つの判本のうち唯一、タイトル・ページの発行年の下に、出版許可と特認を得たことが記されている。断言はできないものの、出版許可取り消し以前に印刷された可能性がある。この版本には、他の2つの版本では序文の次にくる、「読者への覚

²¹ David Smith, *Bibliography of the Writings of Helvétius*, Ferney-Voltaire, Centre international d'étude du XVIII^e siècle, 2001, pp. 155-159, 187-191.

²² リヨンで押収された版本について、ヴァリーは、スミスの文献目録のE.7かE.16が該当すると推測している。Dominique. Varry, *op.cit.*, 2003, p. 117. しかし、E.16には1761年という刊行年が記されている。E.6の誤記であろうか。

え書き」が欠けている。さらに、流通した正規初版本、および E.7、E.16 には見られない、不注意と思われる誤植が散見される。第 1 巻からいくつかを例示してみよう。() 内は正しい語である。

page 2 ligne 14 : L'ame est la faculté (L'une est la faculté)

p.2 l.30 : Si la matiere (Si la nature)

p.23 l.13 : arracher une idée nette (attacher une idée nette)

p.30 note l.3 : payant (paysan)

E.7 と E.16 の巻末には E.6 にはない付録がつけられている。E.7 には『精神論』を断罪したパリ大司教ボーモン (Christophe de Beaumont, 1703-81) による教書 (Mandement de Monseigneur l'archevêque de Paris) が、E.16 にはこの教書に加えて、「『精神論』のカテキズム」と、断罪文書に反論した「『精神論』と題された書物に対する諸批判の検討」が付されている。制作時期によって「付録」が増えていったのだと考えるのが妥当であろう。なお、「諸批判の検討」は無署名であるものの、フランス国立図書館の目録などでは、『精神論』の検閲官にテルシエを推薦したル・ロワの手になるものとされている。

これら 3 つの版本に見られる装飾には、ブリュイゼが正規の手続きによって印刷した版本の装飾と著しい一致が認められる (図版 1、2、3、4 参照) もの、同様の装飾はリヨンの他の印刷業者の手になる書物にも使われているのが確認されるため、これをもって印刷業者を同定する決定的根拠とすることはできない。

これら 3 つの版本で使用されている用紙の透かしは一致しない。ただし、E.16 の第 1 巻の用紙のウォーターマークが、ブリュイゼが実名で印刷した宗教書など²³のそれと一致するのを確認した。18 世紀には紙の流通範囲が比較的限られていたため、用紙によって印刷された街をほぼ特定可能であると考えられる。しかし、同じ用紙を複数の業者が使用していた可能性を排除することができないため、現在の研究の状況では用紙によって印刷工房を特定する根拠とすることはできない。

以上、筆者の調査によって確認された痕跡は、これら 3 つの版本がリヨンで印刷されたと推測するにたる状況証拠とはなりえても、印刷業者を特定する決定的根拠にはならないと考える。冒頭で触れた警察記録と合わせて、ブリュイゼが印刷した可能性が高いと推測しうるに留まる。

²³ M. Durand [Pierre-Toussaint Durand de Maillane], *Histoire du droit canon : pour servir d'introduction à l'étude du droit canonique*, Lyon : Jean-Marie Bruyset, 1770. (BNF : E-5921 ; 早稲田大学 F320 00014) . [Jean Paganucci], *Manuel historique, géographique et politique des négocians, ou Encyclopédie portative de la théorie et de la pratique du commerce*, 3 vol., Lyon : Jean-Marie Bruyset. 1762 [サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館 : 8 R 963 (28-30) INV. 3780 3782 FA]. 後者は、バルビエによれば、リヨンで 1761 年 2 月 4 日付で発行された出版許可とヴェルサイユで同年 9 月 27 日に発行された特認をつけて出版されている。Antoine-Alexandre Barbier, *Dictionnaire des ouvrages anonymes*, s.l., s.n., 1875, t. III, col. 54.

4. リヨンで印刷されたと推測される『人間論』

『精神論』の発売禁止により、禁書作家となったエルヴェシウスは、1759年2月、パリ高等法院での審議において、今後は『精神論』と同様の内容の書物は決して書かない、と誓いを立てていた。しかし、密かに執筆作業を続けており、いくつかの遺稿を残して、1771年12月26日、失意のうちにこの世を去った。とくに『人間論』、詩集『幸福』の二つの作品は、正規の出版手続きをとらずに次々と印刷された。比較的早い段階で現れた版本のなかに、やはり、リヨンで印刷されたと推測されるものがある。

スミスがH.4、H.5、H.6と付番した『人間論』の3つの版本には、装飾について先に見たりヨんで印刷されたと推測される『精神論』と著しい類似が認められ、同じ印刷工房で制作された可能性があるとして推測される。

H.4 Londres, 1773, 2 vol. in 12° (名古屋大学 : 貴 135 Ziyusiso 135.3/ H/ 62N-951 ~ 952 ; 早稲田大学 : 文庫 22 / 398 1 ~ 2)

DE / L'HOMME, / DE / SES FACULTÉS / INTELLECTUELLES, / ET DE / SON ÉDUCATION /
Ouvrage Posthume de M.HELVÉTIUS / A LONDRES, / Chez LA SOCIÉTÉ TYPOGRAPHIQUE. / M.DCC.
LXXIII.

Vol. 1 [i-iv] [v] vj-x [xi] xij-xliij [1] 2-399 ; misprinting xxix as xxvix, 361 as 341; not paginating 316 and 344.

Vol. 2 [1] 2-495; misprinting 446 as 442, 447 as 443, 449 as 452, 452 as 449, 470 as 70.

H.5 Londres, 1774, 2 vol. in 12° (慶應義塾大学 : 120Y1007@2@1 ~ 2)

DE / L'HOMME, / DE / SES FACULTÉS / INTELLECTUELLE, / ET DE / SON ÉDUCATION /
Ouvrage Posthume de M.HELVÉTIUS / A LONDRES, / Chez LA SOCIÉTÉ TYPOGRAPHIQUE. / M.DCC.
LXXIV.

Vol. 1 [i-vii] viij-xij [xiii] xiv-xl [1] 2-231 [I]² 1-123.

Vol. 2 [1-5] 6-462.

H.6 Londres, Société typographique, 1774, 2 vol. in 12° (筆者所蔵)

DE / L'HOMME, / DE / SES FACULTÉS / INTELLECTUELLES, / ET DE / SON ÉDUCATION /
Ouvrage Posthume de M.HELVÉTIUS / A LONDRES, / Chez LA SOCIÉTÉ TYPOGRAPHIQUE. / M.DCC.
LXXIV.

Vol. 1 [i-vii] viij-xij [xiii] xiv-xl [1] 2-354.

Vol. 2 [1-5] 6-462. misprinting 49 as 36 (with a I above it), 53 as 54, 261 as 362, 289 as 291

なお、H.6 第2巻の用紙のウォーターマークがE.16 第1巻のそれと一致するのを確認した。

5. リヨンで印刷されたと推測される『幸福』

遺稿詩集『幸福』について、旧体制下のリヨンで印刷された書物に関する研究において第一人者と目されるヴァリーは、スミスがB.2と付番した版本がジョフロワ・ルニョー (Geoffroy Regnault, 1710-179?) によってリヨンで印刷されたと推測している²⁴。

B.2 Londres [i.e. Lyon], 1772, in 8° (BNF : Ye10119 ; 早稲田大学 : 文庫 22 237)

LE BONHEUR, / POÉME, / EN SIX CHANTS. / Avec des Fragments de quelques Épîtres. / Ouvrage posthumes de M.HELVÉTIUS./ A LONDRES./ M.DCC.LXXII.

[i] ii-cxx [1] 2-18 [19] 20-32 [33] 24-54 [55] 56-68 [69] 70-80 [81] 82-102 [103] 104-116.

ルニョーもまた、リヨンで代々印刷業に従事した家系に生まれた²⁵。リヨンの出版検査官ブルジュラによる1763年12月24日付の通信文によれば、ルニョーの印刷工房は3機の印刷機を備え、海賊版を手広く制作していたらしい (BNF : FF22128, f^{os} 291-302)²⁶。また、1759年に、リヨンではじめてとなる貸本屋を開いている²⁷。

たしかに、ヴァリーが指摘しているように、B.2には、正規の手続きをふまえてルニョーが自らの名を掲げて刊行した書物に見られる装飾との一致が複数認められるうえ、飾り文字の特徴も酷似している。たとえば、B.2のサン＝ランベールによる序文の冒頭に付された装飾 (p. i) である²⁸。しかし、同じ金型から制作された装飾が複数の印刷業者で使用されたり、業者間で貸し借りされたりもしたので、装飾が一致しただけでは印刷業者を特定することはできまい。B.2には、H.5、H.6と特徴を著しく類似する装飾も多数用いられており、そのうちの複数の装飾が、ブリュイゼ、あるいはその他のリヨンの印刷業者によって用いられている例に事欠かな

²⁴ 次のウェブ・ページを参照。「La fausse adresse “Londres” au XVIII^e siècle », <http://dominique-varry.enssib.fr/Fausse%20adresse%20Londres>

やはり、オーナメントを手がかりとして、次の研究もB.2はH.4とともに、ルニョーの印刷工房で作られたと推測している。Claudette Fortuny, « Les éditions lyonnaises de l'*Histoire des deux Indes* de l'abbé Raynal », *Histoire et civilisation du livre*, Genève : Droz, 2006, Vol. 2, pp. 176, 181.

²⁵ 1710年8月17日、サン＝ニズイエ Saint Nizier 教区で洗礼を受けた記録が残っている。AML : 1GG.64 f^o 43 v^o。なお、この一族の名には、RenaudやRounaudなど複数の綴りが認められ、いずれを採るかによって音が異なる可能性がある。本稿では便宜的に、こんにちの研究者の間で一般的に用いられている綴りに従う。

²⁶ cf. Léon Moulé, « Rapport de C. Bourgelat sur le commerce de la librairie et de l'imprimerie à Lyon », *Revue d'histoire de Lyon*, tome XIII, 1914, p. 53.

²⁷ cf. Paul Benhamou, “Reading trade of Lyon : Cellier’s cabinet de lecture”, *SVEC*, 308, 1993, pp. 305-321.

²⁸ *Voyage au mont-Pilat, dans la Province du Lyonnais...*, A Avignon, Et se vend A LYON, Chez Regnault, Imprimeur-Libraire, grande rue Merciere, M.DCC.LXX, [Bibliothèque Sainte-Geneviève : S1569], p. 1.

い。さらに、用紙のウォーターマークが、E.16 および正規の手続きを経てブリュイゼが出版した書物のそれと一致しているのを確認した（注 23 参照）。

なお、スミスは、『幸福』の3つの版本（B.9, B.10, B.12）がリヨンの印刷業者バレ（Jean-Marie Barret, 1731-86）によって制作された可能性があると指摘している²⁹。この業者については、残念ながら今回は論じる用意がない。ここでは、これらの版本の組版、装飾が、B.2 とはまったく異なっていることを指摘するにとどめたい。

6. リヨンで印刷されたと推測される『エルヴェシウス全集』

最も早い段階で現れた『エルヴェシウス全集』も、リヨンで印刷されたようである。スミスは、1774年に8折判4巻本として刊行された全集（O.1）について、タイトル・ページには発行地がリエージュと記されているものの、実際にはリヨンで印刷された版本だと推測している³⁰。スミスの目録から同定に必要な最小限の書誌情報を拾っておこう。

O.1 Liège, Bassomierre [i.e. Lyon], 1774, 4 vols, in 8° (BNF : 8-Z28818 ~ 28820 ; 筆者所蔵)
ŒUVRES / COMPLETTES / DE / M. HELVÉTIUS / TOME PREMIER. [SECONDE. TROISIEME. QUATRIEME.]

Vol. 1 Half-title DE / *L'ESPRIT* [i] ij-viiij [1] 2-58 [58] 59-620 [621] 622-634.

Vol. 2 Half-title DE / *L'ESPRIT* [1] 2-80 79-191194-223 [224] 225-226.

Half-title *LE BONHEUR* [i-iii] iv-civ [105] 106-118 [119] 120-130 [131] 132-148 [149] 150-160. [161] 162-170 [171] 172-188 [189] 190-202; misprinting lxxxiii as lxxiiij.

Vol. 3 Half-title DE / *L'HOMME* [i-vii] viij-xvj [1] 2-482 [483] 484-495; misprinting 327 as 325.

Vol. 4 Half-title DE / *L'HOMME* [1] 2-596 [597] 598-615; misprinting 429 as 427.

この全集の第1巻には『精神論』の前半を、第2巻には『精神論』の後半と遺稿詩集『幸福』を、第3巻と第4巻には『人間論』を収めている。特に、第2巻の2つの作品には、それぞれ別々にノンブルがふられており、使用されている活字セットや組版ルールもまったく異なっている。それぞれの作品の組版ルール、装飾などは、すでにみたりヨンで印刷されたと推測される版本と酷似している。『幸福』（B.2）がルニヨーによって印刷されたとするヴァリーの推測が正しいとすれば、この全集の制作にあたって、ブリュイゼとルニヨーが協力していたのであろうか³¹。その可能性を排除するにたる根拠は発見できなかった。しかし、この全集を構成す

²⁹ D. Smith, *op.cit.*, pp. 264-269, 272-275.

³⁰ *ibid.*, pp. 1-11

³¹ 両者が協力関係にあったとすれば、1760年代にルソーの『社会契約論』の海賊版をめぐるリヨンで起こった騒動との関連で興味深い。拙稿「リヨンの印刷業者レギヤによる海賊版『社会契約論』(1762年)

る4つの巻にはくりかえし同じ装飾が使用されており、すべての巻が同じ印刷工房で制作された可能性も排除できない。

これまで言及してきたエルヴェシウスの諸著作の版本がリヨンで印刷されたことについては、ほぼ間違いないと推測されるものの、研究の現状に鑑みると、印刷工房を特定する決定的根拠としようる情報にいきついたらいいがたい。

7. パリとリヨンをつなぐ補助線か？

『精神論』の正規初版本のタイトル・ページには版元としてデュラン (Laurent Durand, 1712?-63) の名がかかげられている。こんにち、デュランは、『真価と美德についての試論』(1745)、『哲学断想』(1746)、『不謹慎な宝石』(1748)、『盲人書簡』(1749) といったディドロの作品を正規の手続きを経ずに秘密裏に出版したほか、『百科全書』の4名の共同出版者にも名を連ねていたことで知られている³²。デュランについて、パリの出版検査官、デメリー (Joseph d'Hémery, 1722-1806)³³ は、「このうえなく疑わしく狡猾な書店業者」(BNF : FF 22108, f°26)³⁴ と評価していた。実際、宗教書などを正規の手続きで出版するとともに、公式、非公式に哲学書の出版にもかかわっていた。1746年にアムステルダムのモルティエ (Pierre Mortier) の名を版元としてかかげて印刷されたコンディヤックの『人間認識起源論』も、ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-78) の証言によれば、デュランが版元であった³⁵。よく知られているように、世界の秩序を根拠にその造り手たる神の存在を証明しようとする議論を退ける唯物論的無神論を展開した『盲人書簡』のために、ディドロは3ヶ月にわたって、ヴァンセンヌに投獄された。この件で、著者に先立って警察の取り調べを受けたのはデュランであった。1749年8月1日、トゥサンの『習俗論』とともに、『哲学断想』、『不謹慎な宝石』、『盲人書簡』を出版したことを自白し、これらの著者の名と印刷した業者を明かした。恭順の意を示したデュランは逮捕を免れている (BNF : NAF 1311, f°10)。

制作の舞台裏—旧体制下フランスにおける禁書・海賊版の地下出版と出版統制の緩—『日本18世紀学会年報』第35号、2020年10月、52～66頁、参照。なお、オーナメントを手がかりとして、次の研究は、本全集の第1,2巻をフォシュー (Claude André Fauchaux) が、第3,4巻をヴィアロン (Claude André Vialon) が、それぞれ制作したと推測している。Claudette Fortuny, *op.cit.*, p. 181.

³² cf. Frank A. Kafker, Jeff Loveland, « Diderot et Laurent Durand, son éditeur principal », *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 2005, n° 39, pp. 29-40.

³³ この人物の伝記情報については次を参照。Ernest Coyecque, *Inventaire de la collection Anisson sur l'histoire de l'imprimerie et la librairie, principalement à Paris*, Paris : E. Leroux, 1900, 2 vol., t. I, pp. i-li. Albert Labarre, article « Hémery, Joseph d' », dans le *Dictionnaire biographie française*, Paris : Letouzey et Ané, t. XVII, 1989, pp. 888-889. Jean-Dominique Mellot, article « Hémery, Joseph d' », dans le *Dictionnaire encyclopédique du livre*, sous la direction de Pascal Fouché et al., Paris : éd. Du Cercle de la Librairie, 2002-2011, 3 vol., t. II., 2005, pp. 465-466. Jean-Dominique Mellot, Marie-Claude Felton et Élisabeth Queval, *La police des métiers du livre à Paris au siècle des Lumières*, Paris : BNF Éditions, 2017, pp. 15-23.

³⁴ cf. Jean-Dominique Mellot, Marie-Claude Felton et Élisabeth Queval, *op.cit.*, p. 207.

³⁵ Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, Paris : Gallimard, 5 vol., 1959-1995, t. I, p. 347.

ここで、エルヴェシウスの著作の非正規本を制作したと推測されるリヨンの印刷業者とデュランをつなぐ補助線となりうるかもしれない2点の書籍に触れておきたい。まず、こんにちカジョ (Dom Jean-Joseph Cajot, 1726-79) に帰せられているルソーの『エミール』に対する批判書である。

LES / PLAGIATS / DE M. J. J. R. DE GENEVE, / SUR / L'ÉDUCATION [...] / D. J. C. B. / A LA HAYE ; / *Et se trouve à Paris,* / Chez DURAND ; Libraire, rue S. Jacques, / à la Sagesse. / M. DCC. LXVI. XXII-[2]-378-6 p (BNF : 8-Z-10380³⁶ ; 早稲田大学 : 文庫 22 2231 ; 慶應義塾大学 : PDB@371.235@R1@2 ; 筆者所蔵) .

この批判書に注目する理由は次の4点である。

- 1) この版本の装飾には、『精神論』(E.6, E.16)、『人間論』(H.4, H.5, H.6)、『幸福』(B.2)、『全集』(O.1) で使用された装飾と著しい一致が認められる (図版5、7 参照)。
 - 2) タイトル・ページには、印刷者の名前を記さずに、デン・ハーグと、おそらくは偽りの発行地を記したうえで、パリのデュラン書店で販売されていることをうたっている。これは黙許を得て印刷された書物にしばしば見られる表記である。
 - 3) 『エミール』への参照箇所が12折判の「リヨンで印刷された海賊版」(p.xxiii) に依拠しているとわざわざ断わっている。実際、本文で指示されるすべてのページが、ブリュイゼがリヨンで印刷した海賊版³⁷ と完全に一致することが確認された (図版6 参照)。
 - 4) この版本の巻末には、6頁にわたるデュラン書店に在庫の新刊書、近刊予定書の目録が付けられている。パリのデュラン書店で販売されていた可能性を示唆するものだと考える。なお、1763年版のリヨンのブリュイゼ書店の在庫目録には、この作品は記されていない³⁸。
- 1) と 2) の2点については、ルソーに対する別の論難文書にも同様に認められる。

LETTRES / D'UN / PHILOSPHE SENSIBLE, / PUBLIÉES / Par M. DE LACROIX. / A LA HAYE ; / *Et se trouve* / A PARIS, / Chez DURAND, Neveu, rue Saint- / Jaques, à la Sagesse. / M. DCC. LXIX. xv + 276p. [BNF : Y2_9588]

これら2点の批判書に残されたわずかな情報が示唆するのは、ブリュイゼとおぼわしきリヨ

³⁶ フランス国立図書館のデジタル・アーカイブ、ガリカで画像ファイルを参照可能である。https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k9633336p.r=josephe%20cajot?rk=42918;4#

³⁷ スイスをはじめ、主としてドイツ語圏で流通したこの版本については、次の拙稿を参照。「旧体制下フランスにおける地下出版ーリヨンの印刷業者ブリュイゼによる海賊版『エミール』(1762年)制作の舞台裏ー」、『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』No.76、2020年3月、7～22頁。

³⁸ *Catalogue des livres françois sur toutes sortes de matieres, qui se trouvent à Lyon, chez Jean-Marie Bruyset, 1763* [BML : Cote : 371371 T. 11 (3)].

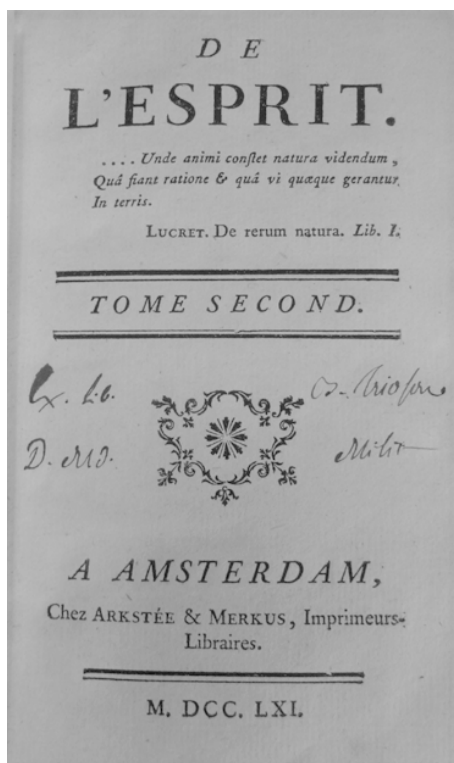
ンの印刷業者が、『精神論』の正規版元であったパリのデュラン書店のために黙許を得た書物を印刷していた可能性である。あるいは、ブリュイゼは、デュランの名前を隠れ蓑として利用したのかもしれない。情報の乏しさに鑑みて、現段階で両者の関係のありようを確認することはできない。関連する資料を発見すべく、さらに調査を続けたい。

おわりに

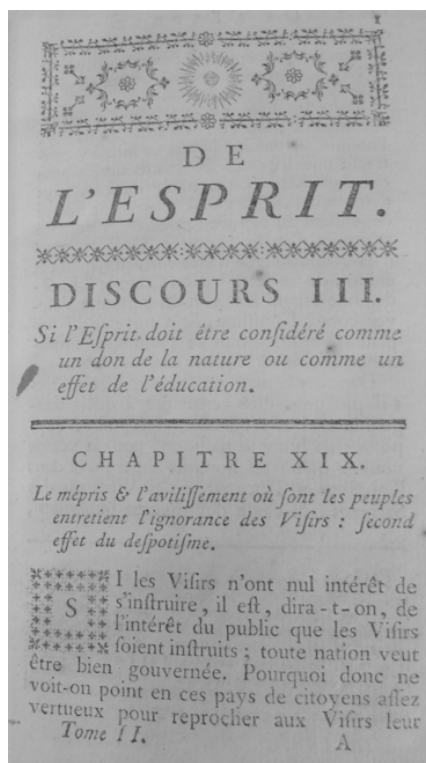
王権や有力貴族に近かったごく一部の業者たちに特定の書物の印刷、販売を排他的に認める特認制度の裏で、特認のついた書物や禁書を秘密裏に印刷する地下出版に手を染める業者たちが存在した。危険を冒して売れるものならなんでも印刷する、このような業者たちが存在しなかったとしたなら、こんにち古典として読み継がれている数多くの作品が日の目を見ることさえなかったかもしれない。秘密裏に流通した非正規本は、しばしば、正規本よりも早く広まって読者の手に渡った。作品の影響力を広げることに一定の貢献をなしたのである。

これまで大学図書館などでは、古典作品の正規初版本が競うように求められ、宝物として大切にされてきた。これに対して、非正規本には必ずしも正当な注意が払われてきたとはいえない。しかし、正規の手続きを経ずに印刷された版本をめぐって残された断片的な情報は、旧体制下であって危険視されていた新しい思想を綴った書物がどのように流通し、広まったのかをあとづけるための有力な手がかりを与えてくれる可能性がある。旧体制下のフランスで制作された非正規本の多くは、こんにち、その印刷者や流通経路を確定することがきわめて困難な状況にある。エルヴェシウスの作品は、『精神論』がひきおこした騒動、著者に対する批判的なまなざしのために、相対的に豊かな情報が残されている稀有な事例といえる。本稿でとりあげた、リヨンで非正規に印刷されたと推測されるエルヴェシウスの作品には、装飾や組版ルールといった物理的な特徴に顕著な系統性が認められることから、より同定が困難な同時代の著述家の作品について、同じ街で制作された非正規本を検討するための有益な手がかりを提供しうると考える。

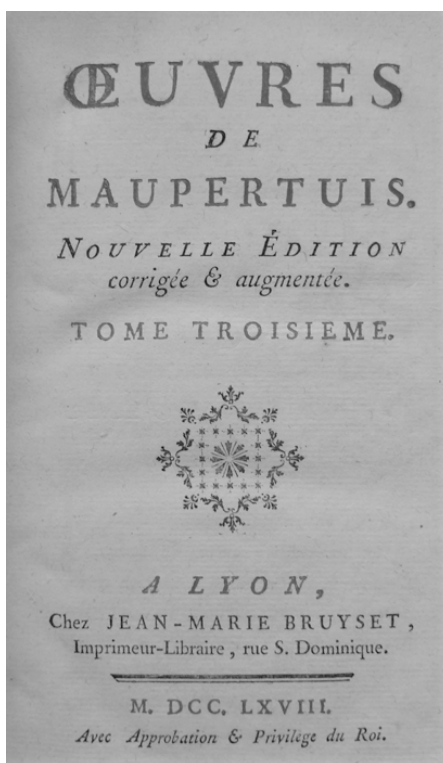
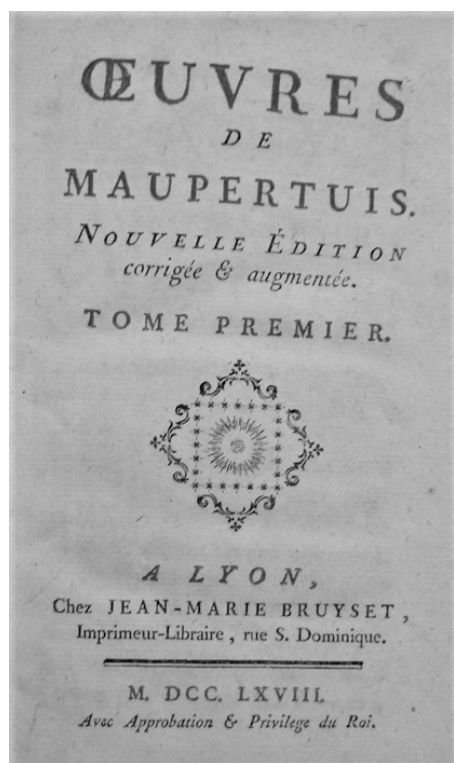
〔付記〕本稿の準備にあたり、リヨンの市立パール＝デュー図書館、市立印刷博物館、科学文芸アカデミー資料室、高等師範学校付設デイドロ図書館、市公文書館、ロヌ県公文書館、パリのフランス国立図書館（トルビアック、アルスナル、リシュリュエ）、マザラン図書館、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、名古屋大学、一橋大学、慶應義塾大学、早稲田大学で貴重な資料の閲覧を許された。この場を借りて、関係各位に謝意を表明したい。文末にまとめた図版は、いずれも筆者が所蔵する版本を撮影したものである。なお、本稿とほぼ同じ内容のフランス語論文が、次のように公になっている。Yûji Sakakura, « Les publications clandestines en France sous l’Ancien Régime : le cas des versions illicites des œuvres d’Hélvétius imprimées à Lyon », *Historia philosophica*, vol. 20, Pisa / Roma : Fabrizio Serra editore, nov., 2022, pp. 87-99.



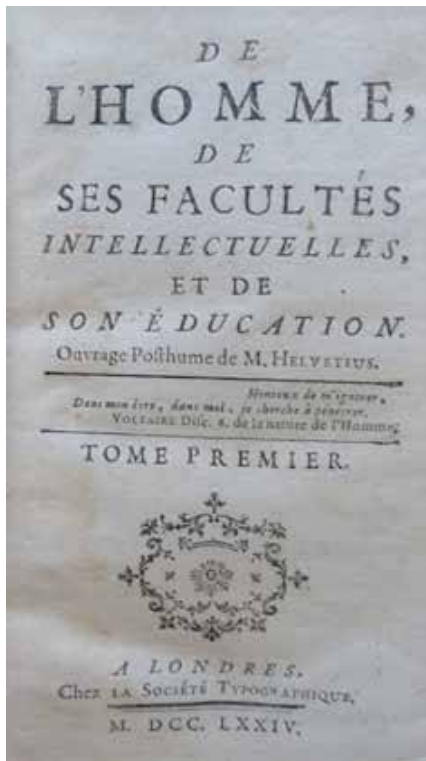
【図版 1】 E.16



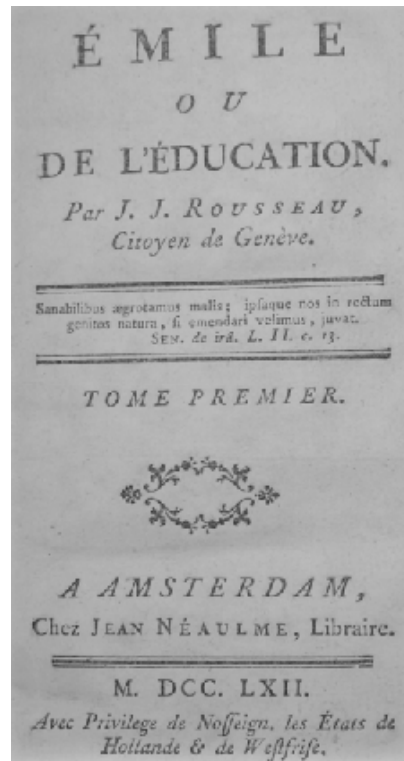
【図版 2】 E.16



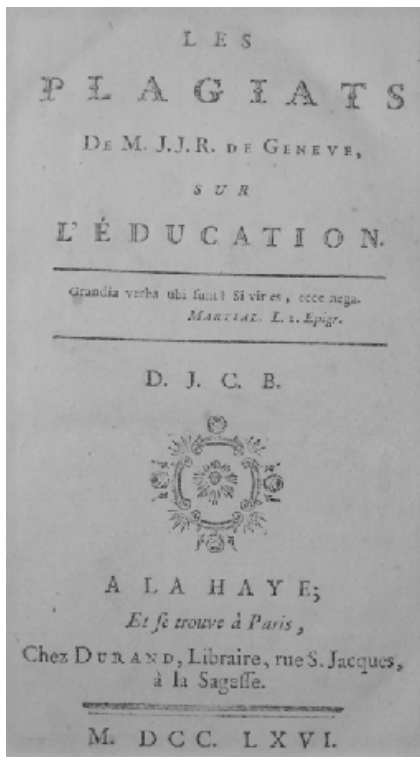
【図版 3、4】 J.-M. ブリュイゼが正規の手続きで出版した『モーベルチュイ著作集』



【図版 5】 H.6



【図版 6】 J.-M. ブリュイゼが印刷した海賊版『エミール』



【図版 7、8】『教育に関するジュネーヴの J.J.R 氏の剽窃』

